

---

# GARDEN

裏手のバーテン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

GARDEN

### 【Nコード】

N2626S

### 【作者名】

裏手のバーテン

### 【あらすじ】

今世紀最高のゲームと言われるネットゲームがあった  
俺はそこで長年プレイしていたが、久々のゲームのアップデートに  
ルンルン気分でのゲームにログインした

しかし

…え、どゆこと？ みんなログアウト出来ないの？

これはログアウト出来ず、そして死すら“訪れなくなった”プレイヤー達がリアルに帰ろうと奮闘する物語  
信頼と裏切りが交錯し、彼らはこのゲームの真実に直面した時、彼はいかなる選択をするのだろうか？

ネットゲ-からログアウト出来なくなりました(前書き)

駄文ですがどうぞよしなに

ネットゲーからログアウト出来なくなりました

《ようこそGARDENへ》

無機質な女性の声と共に目の前にイナバウワーみたいな態勢で銃弾を避ける某映画の様な文字の滝が視界一杯に流れた後、それが見えなくなると中心に背中合わせの二人の女の天使が佇む銅像の立てられた噴水が目の前に現れる。

今世紀最高のネットゲームは何か？、と聞かれたらゲームの十人中八人は“GARDEN”と答え、二人は“庭”と答えるだろう。

しかし二つとも同じゲームをさす言葉なのだが……

つまりはそれ程この正式名称“GARDEN”というゲームは素晴らしい……いや凄まじいともいえるネットゲームだった

このMMORPGの最大の特徴……それはネット場に設けられた電脳空間にプレイヤーの“意識を投影する”というSF感丸出しの機能である

このゲームが出たときは某掲示板サイトで

「キタコレ！」

「神ゲーか！」

と祭りになったのは言うまでもない……そうゆう俺も狂気乱舞した一人ではある

そしてこのゲームが出来て六年……ベータテストからやっている俺は相当な年期の入ったプレイヤーだろうな

既に六年もやると見慣れたこの“双子女神の噴水”だが最初に来たときは感動で暫く動けなかったのはいい思い出である

最近“とある理由”でこのエリアに足を運ばなかったせいかわかしくさすら感じるが、肌を感じる風や香りやふとした景色の流動的な動き……とてもバーチャルリアリティで作られた世界とはとても思えないといつも思う。

そんな感慨に耽っていると

「おい邪魔だ」

ドンツと背中を押されてその場から一、三步前に出された俺は押されたほうを振り返った

そこには重厚な青く輝く全身を覆うような鎧、それに先端に鷹の装飾がされた真つ赤な槍を肩に担いだ男が立っていた

見た目からして“ライダー”か“ナイト”……またはナイトの上位職の“パラディン”かもしれん

「ああ、悪い……」

つつたっていた俺も悪いし道を譲ると

「……… たく雑魚が道の真ん中でつつたってたんなよな」

そう吐き捨てて男は去っていく

全くプレイマナーのなってない奴である……… そう思い苦笑しながら俺はその場を後にした

この双子女神の噴水のあるエリアは“シェトラズトリ”というこのゲームでは“ヒューマン”という種族が最も住む国である

“ヒューマン”とは所謂人間を指し、このゲームには“ドワーフ”や“エルフ”、他にも“ピクシー”や“ビースト”なんて種族も存在しているが、プレイヤーはその中から種族を選んでプレイすることが出来る。

そしてこのゲームは選んだ種族によって選択出来る“専用職”というものがあるのも特徴だ

まあ全ての職の数は数々のアップデートに膨大な数になるためここでは割愛させていただく。

そして俺は双子女神の噴水から歩いて十分……… 数々の露店商がひしめくメインストリートから少し外れた所にある裏道に入った所に露天を開く人物に声をかけた

このゲームでは自分の顔を幾つものサンプルデータから弄って作れる為に大体のプレイヤーが美男美女なのだが、この男は何故かぼつてりとした腹にちよび髭、そしてターバンという一昔のゲームに出てきそうな商人のオツサンみたいなキャラを使う奇特な奴である

「よっ！トルネロ」

その男……勿論職業も“商人”のトルネロはこちらを向くと

「ん？ 誰だな？」

と怪訝な顔をした

「俺だよ俺」

何か詐欺の口上みたいになってしまったがトルネロは未だに怪訝な顔をしている

「なんだ忘れたのか？ ザックだよ」

その言葉を聞いた瞬間トルネロは目をあらんかぎりに見開く、オツサン顔に凝視されてちよつとビビった…



「ザック……ザック・バラントインだな！ 久しぶりだな、ザック  
！あの“戦い”以来だな？」

「その喋り方も相変わらずだなトルネロ」

どこか懐かしむようなトルネロに俺も笑顔になった

このトルネロと俺はベータテストからの知り合いで、リアルでも付き合いのある友人である

「それにしてもザックは“死術師”だった筈だな……なんで“信者”なんて職をやってるんだな？」

ムムム……いった感じで悩む彼に

「ああ……“転生”したんだ」

とサラッと答えた。

それにトルネロは呆れた顔をして

「また転生したの？ ザック……君は化物だなホントに」

「最強を目指してるからな俺は」

呆れるトルネロにカッカカと笑ってやった

ネットゲーからログアウト出来なくなりました(後書き)

捕捉

イナバウワーみたいに銃弾避ける某映画||マトリックス

トルネコ||トネコ

これはみんなわかるよね？

ネットゲーからログアウト出来なくなりました「2」（前書き）

第二話です

ネットゲーからログアウト出来なくなりました「2」

「全く……名前も見た目も変わってるから分かんなかったんだな」

トルネコはちょび髭を右手で弄りながらこちらをジロツと俺を見据える

こいつはこんな身なりに商人という下位職業でありながら知る人ぞ知るトッププレイヤーの一人である。

そのせいか奴の目には妙な威圧感がある……まあ言いたいことも付き合いが長いからわかるが

「お前だつてわかるだろ？ “あの戦い” から俺“達” は有名になりすぎた……そしてあの戦いから俺たちの道は三叉路の様に別れちまっただつて」

一つは名を求め、一つは名を恐れ、そして一つは名を捨てる……。その三叉路は交差することはあれど一つになることはない。

「それは変えられないことなのかい？」

「ああ……」

俺はザック・バランタインという名を捨てた……あの名前は俺には重すぎた名前なんだよトルネロ……。トルネロに背中を向けた俺は

「変えられないね……俺は変わらないが俺の名前と“俺達がいたギルド”は一人歩きし始めちゃった……まるで英雄譚みたいにな」

「あの時の君らは英雄だった筈だな」

「冗談……“雇われたプレイヤー”に変わりはないさ……たまにお前の所を利用するかも知れない……その時はよろしく頼む」

そういつてその場を後にする俺は、背中をトルネロ向けたまま一度も振り向くことはない。

トルネロは溜め息を吐き、自分の目の前に意識を集中してメニュー画面を呼び出す。

短い電子音と共に現れる二次元の電子画面。

そのフレンド登録画面をトルネロは選択、一番上の段には一番最近登録したキャラクター名「ジーン」という名前が明滅している。

（名前を捨てる……か）

「僕には無理な事そうだな……」

トルネロは今はいない友人の出ていった路地裏の出口を物憂げな顔  
で見続けるのだった……

・  
・  
・  
・  
・  
・

ほろ暗い洞窟の奥、そこで俺は先端にダイヤモンドの形の突起が着  
いた1メートル程の打撃武器の“メイス”を振り回していた

「ふっ！」

短い呼吸と共に放たれる鋭い一撃は、見た目は剣と盾、そして何故  
か長靴を履かせた骸骨の兵士の“スケルトン”の頭部をやすやすと  
砕き、乾いた音と共に骨の兵士は塵に消えていく。

しかし俺は気を抜くわけにはいかない、なんせ視界一杯にウジャウジャとスケルトンが沸き、その中にはまんま腐った死体みたいな“ゾンビ”、おまけとばかりに小型の吸血コウモリの“ブルーバット”が上空を飛んでいた

端から見ればホラー映画真つ青な光景だが、既にこのゲームのプレイ歴の長い俺は全くそんな感情も湧かずに次々倒していく（最初の頃はよく吐いてたな……）

スケルトンの頭を潰し、ゾンビの一撃を右手に装備した円形の盾の“ラウンドシールド”で弾き、上空からのブルーバットの攻撃を掻い潜る。

直ぐ様意識を集中すると、スキルのセットされたコマンドランチャーが自分の目の前に横一列で手の平程の大きさアイコンとして並び、それを確認した俺は直ぐ様発動キーを叫んだ

「ランチャー1・2・3起動！」

このGARDENというゲームはスキルの発動に四つの方法が存在する

一つは呼び出したスキルランチャーのアイコンをボタンの様に押す方法。

もう一つは俺の様にスキルランチャーにセットされた番号を叫び発動する方法。

最後はスキルを発動した後に特定の動作パターンを行って発動する



追従スキルというものがある

特に三つ目の呼び出す追従スキルは俗にゆう“必殺技”と言われる為にボスモンスターとかと戦うハイレベルプレイヤー等はよく使うスキルである

しかし俺の職業……支援スキルは下位職業でトツプクラスに充実してるが、攻撃スキルがトツプクラスで乏しい“信者”な為に使うスキルはもっぱら支援スキルである  
発動されたのは

“プレッシング”

“スピードアクセル”

“ヒール”

プレッシングは一時的な神の加護を受け、攻撃力と防御力を上げ。スピードアクセルは肉体の俊敏性と反射神経の上昇。  
ヒールは減っている体力の回復。

スキル発動と共に俺の体に“仄か”な光が立ち上ぼり、体の周りに“微風”を纏い、体が“ちょびつと”キラキラして体力が回復した

……今の俺はレベルが低いためこんなもんだ

レベルが高ければもうちょいエフェクトが派手になるんだがな

ネットゲーからログアウト出来なくなりました「2」（後書き）

今回のスキルはROから抜粋しました

ネットゲーからログアウト出来なくなりました「3」（前書き）

今回は短い

そして新キャラが登場

ネットゲーからログアウト出来なくなりました「3」

Side ????

その日、私は信じられないものを見た……。

私のゲーム内での名前はリン。GARDENでそれなりな規模を持つギルドに所属していて、今日は“蛍の洞窟”という洞窟タイプのダンジョンに四人パーティーで狩りをしに来ていた。

この蛍の洞窟は地下六階まであり、とにかくモンスターの量と出現率がべらぼうに高いことで有名なダンジョンだが……

「何だか今日はモンスターの出が悪いな」

メンバーの一人がそう呟くと周りの人達もそれに同意する。

確かに今日はやけに出が悪い……いつもなら群れをなして来るブルーバットもスケルトンも数体しか見かけないのだ  
不思議に思いつつも二階に向かう階段に向かった時

「おい、何だあれ？」

階段の手前にそれはいた

夥しい数のスケルトンにゾンビ、ブルーバットの群れ群れ群れ群れ群れ群れ……一階にいるモンスターが全て集まったような数のモンスターがそこで何かに向かって攻撃をしていたのである

即座に臨戦態勢に入った私達は未だ後ろを向いているゾンビやスケルトンを蹴散らしてそのモンスターが襲っている所に飛び込んだ

そしてそこにはおよそ戦闘には向いていない後方支援職の信者の男がその職に似合わない巧みな体捌きで瞬く間にスケルトンとゾンビを倒していく光景があった。

いったい何の冗談だ？

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「いやー、何か悪いね。手伝ってもらっちゃって」

そういつて目の前の片刃の剣を腰に二本差した“ソードマスター”  
と呼ばれる職業の女の人に平謝りする

「いやなに、二階に行く階段であんな大立ち回りをしていれば嫌で  
も目にうつくぞ」

彼女はリンとゆう名前でもここの洞窟の四階に用があるらしい。  
他にも男二人に女一人がいたがさっさと二階にいつてしまった。ま  
あ向こうとしては俺みたいなソロプレイヤーに係わりたくないのだ  
ろう

「しかし君は信者にしては随分と戦闘能力があるな……拳使を目指  
してるのか？」

信者が転職出来る上級職業の中には神官、拳使という正反対の性質  
を持つ職業がある

神官は信者をそのまま強化し、より強力な支援スキルを覚えられ、  
拳使は信者の時と能力がガラリと変わり、拳などの肉体戦闘に通じ  
るスキルを覚える職業である。

まあ下位職業の信者があんな風に戦ってたらそう思うか

「まあ、そんな所です」

実際は“それに近いもの”になるつとしてるから言葉を濁して返答した

「ふむ…だがあまりトレインすると他のプレイヤーに迷惑だから気を付けるんだぞ？」

「はい、以後気を付けます」

そういうリンに敬礼するとリンは苦笑して階段を降りていった

ちよつと調子に乗りすぎたか……まあ今の戦闘で必要なレベルになったし俺は一端ログアウトするかな

そう決断した俺はメニュー画面を呼び出してログアウトするのだった

ネットゲーからログアウト出来なくなりました「3」（後書き）

未だに本編に入れません



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2626s/>

---

GARDEN

2011年5月29日07時39分発行